

「終わりの日」の警告

——聖書の預言——

どうしたら、「終わりの日」の
滅亡から救われるのか!?

Ἀμήν, ἔρχου, κύριε Ἰησοῦ.

横 山 英 実 著
にひきのさかな社

「終わりの日」の警告

聖書の預言

「人類は核戦争で滅亡する」

「人口増加と食糧不足で人類は餓死する」

「滅亡の日。それは、一九九九年七月」

私たちを不安にさせる、このような予言の本が、いろいろ出版されています。このような予言は、果たして本当に当たるのでしょうか。また、予言の一部分が当たるとしても、それを一〇〇%信頼してもよいでしょうか。

恐怖映画を作ればヒットする時代です。興味本位に人々に恐怖を与える本であるとしたら、フィクションとしてはとても面白いかも知れません。そして、読んだ人々は、その時は「コワイ、コワイ、ドウシヨウ？」とおびえるかも知れません。しかし、そのうちに、すっかり忘れてしまって、その本が予言している「滅亡の日」に対して、何も準備

しないことになるでしょう。

「山口百恵の子は男か女か？」

「巨人は優勝するのか？」

こういう予言ならば、結果がどちらにコロんでも、私たちの人生に重大な影響を与えるわけはありません。そして、結果がどちらでも構わないような予言ならば、言う方も聞く方も気が楽です。

しかし、「終わりの日」に関する予言は、結果がどちらでもよい、というわけにはいきません。作り話でも、何でも、面白ければよい、売ればよい、では困るのです。

それは、この世界と、そして何よりも、あなたの人生にとって重大な問題であるからです。

そこで世界の超ベスト・セラー「聖書」は、この「終わりの日」に関してどう語っているのか、またどうすれば滅亡から救われるのか、あなたと調べていきたいと思っています。

目次

第1章	「終わりの日」の前に……………	6
第2章	エゼキエルの預言に関して……………	10
第3章	ダニエルの預言に関して……………	26
第4章	「マタイの福音書」の預言に関して……………	37
第5章	御国の福音・滅亡からどうしたら救われるか……………	46
第6章	「終わりの日について」……………	56
第7章	これからどうなっていくのか……………	65
注・参考文献……………		78

イラスト 島山のりお
阿曾治絵

第1章 「終わりの日」の前に

聖書は、はっきりと「終わりの日」がやって来ると預言しています。聖書が語る「終わりの日」は、人類がかつて経験したことのない最大の苦しみの日です。その日には、家も車も財産も、社会的地位も学歴も家系も、みんなゴミのように役立つことはありません。

しかし、多くの人々が、このようなやがては消え去るものに望みをかけ、それらを得るためにアクセクしています。そして、その日には多くの人々が、自分の人生は一体何だったのか、と悔いるようになります。なぜなら、自分の生命を救うことのできないものばかりを持っているからです。

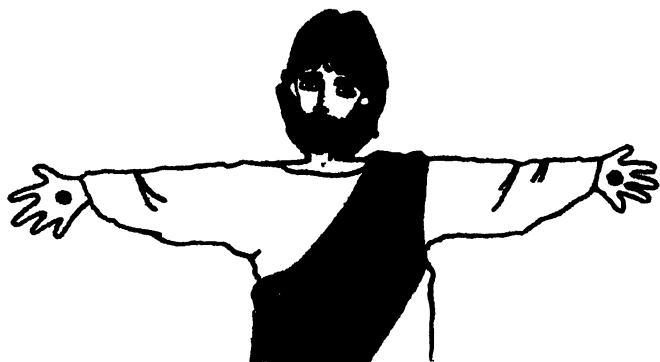
さて、聖書の預言を調べてみると、「終わりの日」がやって来る前に、さまざまな条件が準備されていなければならないことがわかります。これらの条件を知らない人々にとっては、「終わりの日」は突然やって来るように思えます。しかし、これらの条件を調べていれば、現在は、「終わりの日」のどれくらい手前かを判断することができるようはです。

では、「終わりの日」の前に準備される条件とは一体何なのでしょう。

それは、大きく分けて、次の三つになります。

へい エゼキエルの預言に関して

- ①イスラエルという国がもう一度できる
こと（イスラエル再建という）



②エルサレムにユダヤ人たちが住むこと（エルサレム再統一という）
 ③ソビエトが強大な国になり、次の国々を従えること。

⑦チエコスロバキアから東ドイツにわたる国々（東ヨーロッパ）

①エチオピア

②リビア

③イラン

Ⅱ＜ダニエルの預言に関して

①ローマ帝国の血筋と地筋をひくヨーロッパに十カ国連合ができること。

②エルサレムに神殿が再び建設されること。

Ⅲ＜「マタイの福音書」の預言に関して

①にせキリスト、にせ預言者が出現すること。

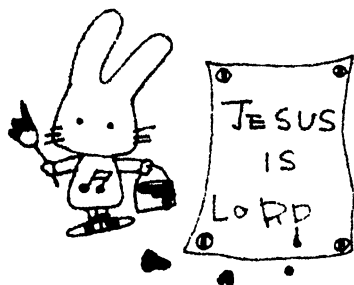
②戦争が多発し、民族が対立すること。

③ききんと地震が多発すること。

9 第1章 「終わりの日」の前に

- ④道徳の荒廃により、人々の愛が冷たくなること。
- ⑤聖書の救いの知らせが、全世界に伝わること。

以上の三つについて、次の章から詳しく調べてみましょう。



第2章 エゼキエルの預言に

関して

エゼキエルという人は、旧約聖書に出て来る預言者です。預言活動をしたのは、約元前六〇〇年ごろですから、今から約二六〇〇年前ということになります。

へー イスラエルという国がもう一度できること（イスラエル再建）

今から約一九〇〇年前のことです。西暦七〇年に、ローマ軍は、イスラエルの首都エルサレムを包囲して、メチャクチャに破壊しました。ユダヤ人たちを殺害し、宗教の中心であった神殿さえも、石がそのまま積まれて残ることはなかったほどの攻撃でした。

（注一）

イスラエルという国は、この時滅亡しました。ちょうどインカ帝国と同じように歴史から、その姿を消したのです。

ところが今から三四年前のことです。奇蹟が起きました。西暦一九四八年にイスラエ

ルという国がもう一度できたのです。

ソビエト、アメリカ、ヨーロッパ、そしてアラブ諸国から、それらの国々で生きのびてきたユダヤ人たちがもとの土地に戻ってきて、国を再建したのです。(注2)

実は、イスラエルが国をもう一度つくるということは、「終わりの日」の預言の最も基本となることなのです。

一九〇〇年間の空白の後、同じ民族の血筋にある子孫たちが、同じ土地に戻ってきて、もう一度国をつくる。しかも以前使っていた文字を復活させ、昔ながらの伝統と習慣を守っている。そして、これらの事はただ偶然に起きたのではなく、二六〇〇年も昔に預言されていたことに注意しなくてはなりません。

こんなことが他にあるでしょうか。たとえば、インカ帝国に同じような事が起こる可能性があるでしょうか。いくら預言があるからと言っても、だいたい、どの人がインカの血を引く人なのかを明らかにするだけでも大変な作業になることが予想されます。

しかし、イスラエルという国は聖書の預言のとおり、「終わりの日」の前に再建され

ました。一九四八年五月一四日、確かに国家として成立したのです。

この時から、「終わりの日」の秒読みが開始されたといっていでしょう。

ヒトラーは、なぜユダヤ人を殺害したのか？

イスラエルの国が再建されるまでの道は、そう簡単なものではありませんでした。むしろ、言葉で表現することさえ難しいほど、ヒドク苦しいものでした。ユダヤ人たちの歴史は、迫害に次ぐ迫害でした。(注3)　そして、最悪の迫害者は、なんといってもヒトラーです。

ヒトラーは、こう語りました。

「ユダヤ人を殺せ。この世界からユダヤの豚どもを残らず消してしまえ」と。

殺害した数は六〇〇万人以上と言われますから、見当もつかないほどの大量虐殺です。

では、なぜユダヤ人をこれほどまでに集中攻撃したのでしょうか。

それは、「終わりの日」の前に「イスラエルが再建する」という聖書の預言が実現しな

いように妨害するためでした。

もし、ヒトラーの計画が成功して、ユダヤ人が残らず殺されてしまっていたら、どうなっていたでしょうか。そうなれば、ユダヤ人はもういないわけですから、イスラエルという国を再建する主人公たちがいなくなることになります。

イスラエルという国が再建されなければ、「終わりの日」の前に「イスラエルが再建する」という聖書の預言は実現しません。

そうなれば、聖書の言葉はウソになります。「終わりの日」もやって来なければ、悪魔の最終的滅亡もありません。永遠の生命も永遠の審きも、何もないことになってしまうわけです。

しかし、悪魔の手先というべきヒトラーの恐ろしい計画は、逆にユダヤ人たちが安住の地を求めて祖先の土地に帰る思いを起こさせる結果になりました。そして、聖書の言葉どおりにユダヤ人たちは帰ってきました。(注4)

（二）エルサレムにユダヤ人たちが住むこと（エルサレム再統一）

新聞やテレビのニュースで、イスラエル軍がレバノンに侵攻していると伝えられていました。今回の戦争だけでなく、イスラエルの周囲では戦争が絶えません。それは、一体なぜなのでしょう。

例をあげて考えてみましょう。

もし、あなたが十九日間の旅に出て、自分の家に帰って見たら、なんと、見知らぬ人があなたの家を占領しているとしたら、どうしますか？

きっとあなたは一一〇番をかけて、警察に、この見知らぬ占領者、つまりドロボーを追いついてもらうでしょうね。

では十九日間の旅ではなくて、十九年間の放浪の旅をして、自分の家に帰って見たら、やはり見知らぬ人が住んでいるとしたら、どうでしょう？

この場合は、日本の民法では見知らぬ占領者の権利をも認めております。つまり、そう簡単には、この占領者をドロボーと決めつけることができなくなるわけです。状況に

もよりますが裁判でもかなり難しいでしょう。

十九年間の出張ではなくて、十九年間の放浪というのは、法律的にはあなたにとって不利なのです。

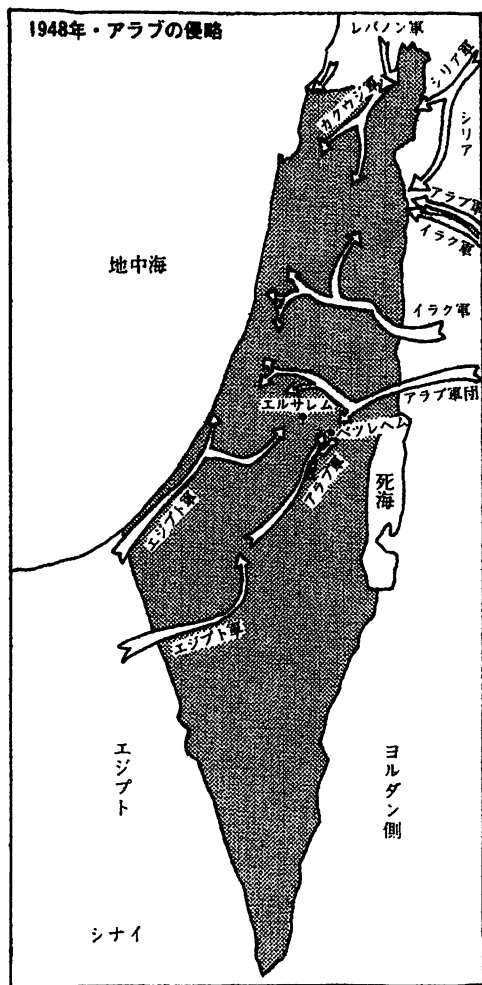
さて、それがイスラエル、つまりユダヤ人の場合、十九年間ではなくて、実際には、その百倍の長さの一九〇〇年間の放浪の旅を終えて祖先の土地に戻ってきたわけです。そうしたら、そこには見知らぬ占領者パレスチナ人が、デンと住んでいたわけです。パレスチナ人としても、そうおいそれと出ていくわけにも行きません。そこで、パレスチナ解放機構（PLO）を組織して、イスラエルと戦うことになりました。

また、イスラエルが建国されたことに反発をもつエジプトはじめアラブ諸国が、イスラエルに対して反旗をかげました。こうして、イスラエルVSアラブ諸国PLSの激しい戦いが、イスラエル建国の時から始まったわけです。

さて、四つの大きな戦いが、今までにありました。次にそれを調べてみましょう。

第一次中東戦争（パレスチナ戦争）

一九四八年イスラエルの初代首相ベングリオンが独立宣言をした直後に始まりました。



イスラエルを囲むアラブ六カ国の軍隊が、ナダレのようにイスラエルに侵入しました。数の上では圧倒的優位のアラブ諸国は、敗退することになりました。そして、イスラエルはパレスチナの大部分を占領し、国際社会でイスラエル国家承認を得ることになりました。この時は、今問題にしているエルサレムは、まだイスラエルのものではありませんでした。エルサレムにユダヤ人が住む、という預言の実現は、もう少し待たなくてはなりませんでした。

第二次中東戦争（スエズ戦争）

イスラエルとエジプトがシナイ半島で戦いました。結局、イスラエルがエジプト領を占領することになりました。

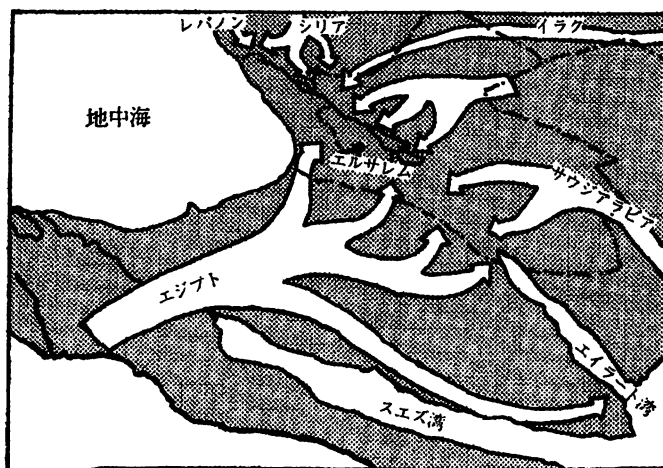


第三次中東戦争（六日戦争）

始まって六日で終結したので、六日戦争と呼ばれています。一九六七年のこの戦いは、「エルサレムにユダヤ人が住む」という預言の実現をもたらしました。複数のアラブ諸国を相手に、結果はイスラエルの圧勝でした。シナイ半島、ゴラン高原、そしてエルサレムを占領しました。エルサレムを獲得したイスラエル軍兵士たちの喜びは、大変なものだったと言われています。

第四次中東戦争

緒戦において、初めてアラブ側が勝利しました。キッシンジャー国務長官の兵力引き離し協定は有名です。



1967年6月・アラブのイスラエル集結

主に以上のような戦いがあつたわけです。大切なのは、「エルサレムにユダヤ人たちが住む」(エルサレム再統一)という聖書の預言が、第三次中東戦争の時、実現したということです。(注5)

一九四八年にイスラエル再建が実現し、一九六七年にエルサレム再統一が実現しました。これらのことは、着々と預言の言葉が事実となっていく時代に、私たちが生きていくことを証明しています。

△ミソビエトが強大な国となり、次の国々を従えること。

⑦東ヨーロッパ ①エチオピア ②リビア ③イラン

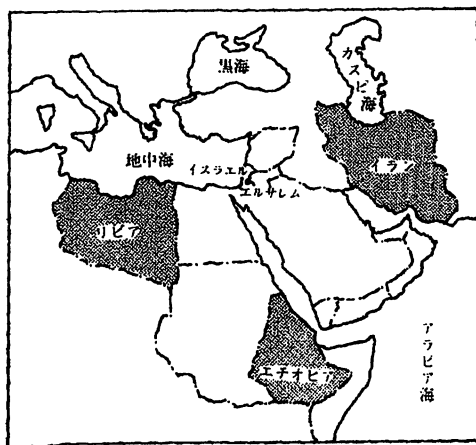
イスラエルが再建されると、北の果てなる国が脅威となると、二六〇〇年前にエゼキエルは預言しています。

つまり、イスラエルが再建した一九四八年以後に北の果てなる国が強大になって、⑦(エ)の国々を従えるというわけです。事実、第二次世界大戦の前には、北の果てなる国は脅威ではありませんでした。

では、北の果てなる国とはどこの国でしょうか。まず地理的に考えてみましょう。イスラエルにとって、北の国は、レバノン、シリア、トルコとなりますが、北の果てということになる、その国はソビエトとなります。世界地図をみていただければすぐ分りますが、イスラエルのほぼ真北にモスクワがあります。

二六〇〇年前には、ソビエトなんてなかったじゃないか、と思う人もいるかも知れません。そこでエゼキエルの語っている言葉、ヒブル語を調べてみましょう。

ヒブル語の辞典では、ゲゼニウスという学者が一番権威があります。その辞典によれば、鍵となる語、メシエクは現在のモスクワ、トバルは現在のラクライナ地方であることがわかります。地理的にも言語的にも現在のソビエトであるといえるわけです。聖書は、さらに次のように預言していま



す。「北の果てなる国が、同盟軍と共にイスラエルに侵入する」と。

そうすると、この侵略戦争が始まる前に、ソビエトと行動を共にするはずの同盟軍の国があらかじめソビエト体制の子分になつていなくてはならないこととなります。そして、子分である同盟軍が㉑㉒の国なのです。ここでは、㉑の東ヨーロッパ諸国がソビエト体制の下にあることは誰でも知っていることなので省略し、㉑㉒の国について調べてみましょう。(注6)

① エチオピア

王制、皇帝制が長く続いていましたが、一九七四年軍事政権が発足しました。メンギスツ軍事評議会議長は、一九七八年に「対ソビエト友好条約」を締結しました。

ソビエトがアフガニスタンを侵略した時もこれを公けに支持するほどの親ソビエト派です。また、アメリカ国防総省の発表によれば、エチオピア領タフラク群島にソビエト海軍基地を建設中である、ということなのです。

一九八一年には、親ソビエト派の三カ国、エチオピア、リビア、南イエメンが共同防衛会議を開催し、対アメリカ、親アメリカ派の国との対策を協議し、友好同盟条約を締結しました。

これで、聖書が預言するとおりに、エチオピアはいつでもソビエトと、軍事行動を共にする準備ができたわけです。

㊦ リビア

クーデタし起きるまでは、西側よりの王制でした。一九六九年に軍事政権が成立し、国名を「社会主義人民・リビア・アラブ国」に改名しました。

一九七五年ソビエトのコスイギン首相がリビアを訪ずれ、「軍事協力協定」を締結しています。それ以後、リビアはソビエトのミグ戦闘機、各種ミサイルなどの武器を大量に買っています。

政治的には、アラブ最強硬派として、激しくアメリカやイスラエルと敵対しています。一九八一年には、演習中のアメリカ戦闘機とリビア機が地中海岸で戦って大きなニュースになりました。

また、イスラエルと和平会議をしたサダト・エジプト大統領に猛反対し、エジプトとの国交も断絶したほど、イスラエルに対しての敵意は猛烈です。

これで、リビアに関する預言も完了したと言っていいでしょう。

① イラン

パーレビ国王時代は、親アメリカ派でした。一九七九年、ホメイニ師が亡命先のフランスから帰国して、「イスラム共和国」の樹立を宣言しました。現在はイスラム教の僧侶たちの独裁体制といっているでしょう。

イスラム共和国になつてからは、「東でもなく西でもなく」つまり、ソビエトにもアメリカにもどちらの体制にも入らないという原則があります。そして現在は、対イラク戦争によつて、アラブ諸国から孤立してしまつています。

現在、イランはソビエト体制の下にあるとは言えないでしょう。この国については預言はまだ実現していないわけです。しかし、やがて預言のとおりに、イランもまた、エチオピア、リビアと同じ様に社会主義国となるのは、遠いことではないでしょう。

どのようにしてイランがソビエト体制になるのかについては推測することしかできません。いろいろな可能性があるとは思いますが、たとえば、こんな推測ができます。

①ホメイニ師が暗殺、あるいは失脚して、社会主義政府が成立される。

②イラク戦争の結果、孤立してしまったのでソビエトに頼むしか方法がなくなってしまう。

③アフガニスタンまで侵攻しているソビエト軍がイランに侵攻し、新政府を成立させる。その時、石油施設は全部ソビエトのものになる。

現実には以上の三つの推測以外の方法が起こるかもしれませんが、それでも、「ソビエトと一緒にイランがイスラエルに侵入する」という預言が実現するためには、必ずイランがソビエト体制になる日が来ることは間違いないといっていでしょう。

そのような理由で、いつクーデターが起こるか、あるいは、ソビエト軍の侵略があるか油断できない現在なので、イランへの投資と旅行は止めておいた方が無難です。

二六〇〇年も昔の預言が、一九四八年のイスラエル建国を始まりとして、着々と実現しつつあることが、おわかりいただけたことと思います。

もし、日本政府と三井物産のトップの方々が聖書を読んでいたら、何千億円もイランに投資しなかったのではないかと思います。あなたはどの思いますか。



第3章 ダニエルの預言に関して

ダニエルという人も、旧約聖書に出て来ます。彼は、夢や幻をみたり、それを解釈する力が与えられていました。活動したのは、エゼキエルと同じころで、やはり約二六〇〇年前ころです。

へいヨーロッパに二〇カ国連合ができること

まず、ネブカデネザルという王様の幻について調べてみましょう。(注7)

聖書によればネブカデネザルは、恐しい巨大な像の幻を見たと言っています。それは次のようなものでした。

頭は、純金

胸と両腕とは銀

腹とももとは青銅

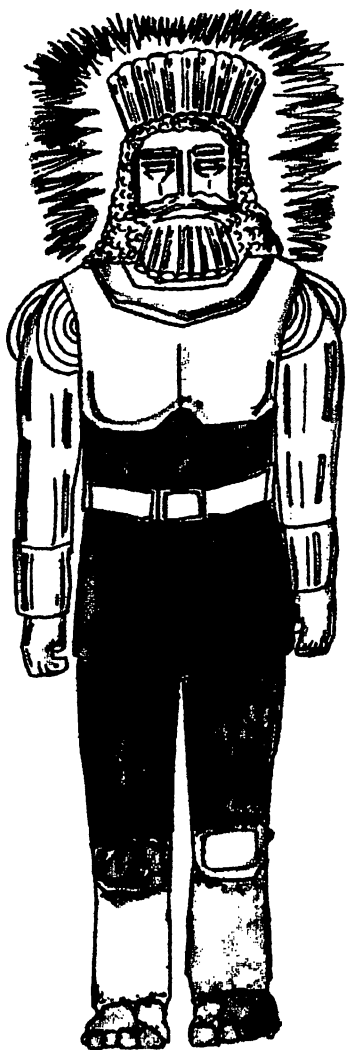
すねは鉄

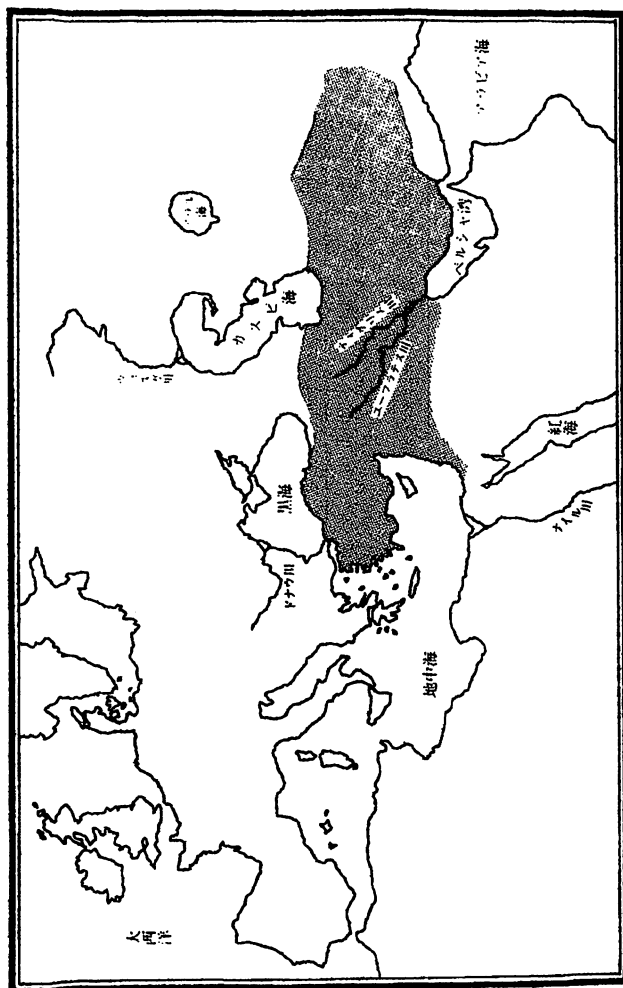
足は一部が鉄、一部が粘土でした。

そして、一つの石が足を打つと、全身が砕けたというものでした。

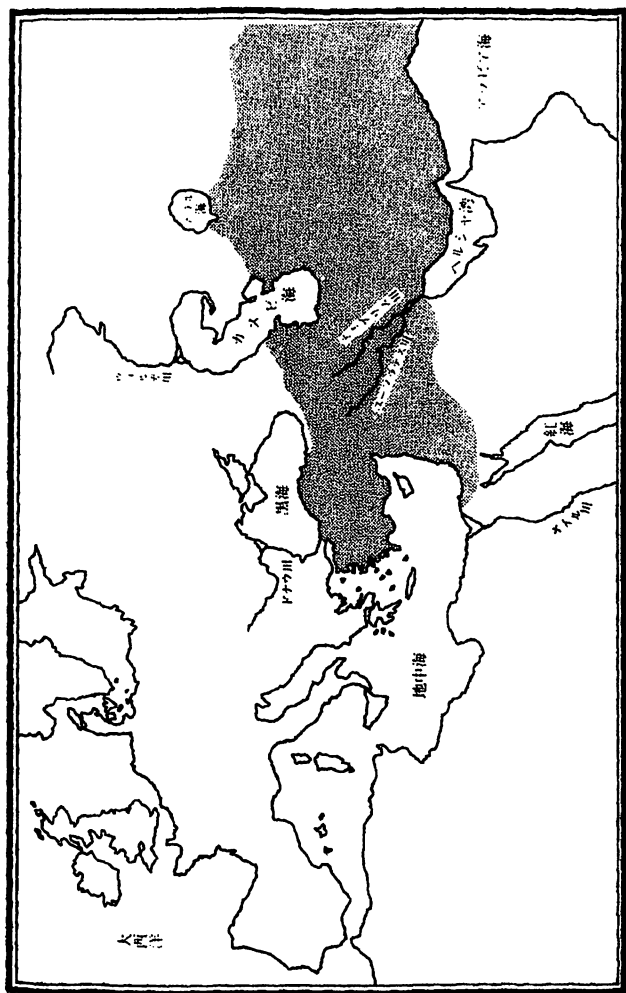
この幻の解き明かしも、同じところに書かれています。

さて、歴史と照らし合わせてみると、この幻の像は次のように理解することができます。





頭はバビロニア帝国 (BC 6 世紀)



胸と両腕とは、ペルシャ帝国（BC 4～5世紀）

すねは、ローマ帝国（BC2～5世紀）

では、最後の「鉄と粘土のまじった足」は一体どの国なのでしょう。

鉄のすねが、ローマ帝国であることはわかりましたから、鉄と粘土のまじった足の国は、ローマが含まれていなければならないことになります。そして粘土がまじっていませんから、ローマ帝国のような強い団結力はない国です。そして、多くの聖書研究者たちは、ヨハネの黙示録と照らしあわせて、この鉄のすねの国が、十か国で構成される、と指摘しています。

さて、ここで一番大切な鍵に注意してみましよう。

その鍵というのは、聖書の預言は、いつもイスラエルという国を中心に世界をみていく、ということです。つまりイスラエルあってこそ、すべてが始まるのです。

最初にお話したように、イスラエルは、鉄のすねの国、ローマ帝国に滅ぼされました。イスラエルがなくなったわけですから、鉄の国で幻の実現は、一時中断していたわけです。つまり、イスラエルが再建されるまで、鉄と粘土の足は、実現しないことになるわけです。

くり返しになりますが、一九四八年にイスラエルが再建されました。ですから鉄と粘土の足は、それより後に実現することになります。一九四八年より後に、ローマ帝国のあった場所で、十カ国連合ができるはずです。しかもローマ（現在はイタリア）を含んで。

聖書の言葉は確実に歴史において実現していきます。

一九五七年、ヨーロッパで、経済共同体、原子力共同体ができました。その調印式はなんとローマで行なわれたのです。最初は次の六カ国で調印されました。

- ① フランス
- ② 西ドイツ
- ③ イタリア
- ④ オランダ
- ⑤ ベルギー
- ⑥ ルクセンブルグ

もう一つ石炭鉄鋼共同体と合わせて、一九六七年に、三つの共同体を一本化して、ヨ

ヨーロッパ共同体（EC）となりました。しばらく、六カ国の時代が続きました。しかし、この共同体はやがて十カ国になるはずだと、多くの聖書研究者たちは予想していました。

一九七三年に、次の三カ国がECに加盟しました。

⑦ イギリス

⑧ アイルランド

⑨ デンマーク

十番目の国はこの国になるのか、そしていつそれが実現するかを、世界の聖書研究者たちは、注目してきました。

とうとう一九八一年にそれが出現しました。

⑩ ギリシャ

これで、ヨーロッパにおける準備が実現したと言っていいでしょう。

へ二へ 神殿の再建

「終わりの日」には、聖なる神殿に汚れたもの（例―豚とか、祭司以外の人とか）が入ることになります。（注8）

このことは、ユダヤ人の歴史上、過去に一度起こっています。アンテオコス・エピファネスという王が、イエス・キリストの死後、神殿の聖所に入り、豚を殺して血を流しました。このときは、三重の汚れが行なわれたことになります。

つまり①ユダヤ人以外の人が神殿に入ったこと。

②豚を中につれていったこと。

③血を流したこと。

最も神聖な神殿の聖所で、一番嫌われていることをアンテオコスはしたわけです。

実は、「終わりの日」にも、同じようなことが起こることになります。

けれども、現在は神殿が建設されていません。この神殿が建設されなければならない場所は、わかっているのですが、実はそう簡単にはいきそうもない問題があります。その場所には現在イスラム教の建物が建っているからです。

どのような方法によってかは、皆目、見当もつきませんが、ともかく、このイスラム教の建物が破壊されて、神殿が建設されることにやがてなるのです。

このようなことが、日本の新聞に載るかどうか、わかりません。しかし、イスラエルの国会（クネセト）が、いつ、この神殿建設の法案を審議し、可決して、工事にとりかかるかについては、注意していなくてはならないといえるでしょう。



第4章 「マタイの福音書」の

預言に関して

マタイという人は、新約聖書に
でています。イエス・キリストの
言葉や活動を記録しました。活動
したのは一世紀ですから、今から
約一九〇〇年前です。

新約聖書のマタイの福音書から調べてみることにしましょう。中心となるのはその中
でも二四章です。そこには、弟子たちがイエス・キリストに「世の終わりにには、どんな
前兆があるのでしょうか。」と尋ねています。そこでイエス・キリストは次のような点をあ
げておられます。

① わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を
惑わすでしょう。(注9)

にせキリストが、アチラコチラに出現するということです。しかも多くの人を惑わすのですから、たくさんの人々が、そのにせキリストを心から信じて従っていくわけです。

ここで注意したいのは、あくまでもにせキリストであって、まったく別の宗教をつくり出すというわけではありません。まったく別の宗教であれば、誰でもその違いに気づくことができるでしょう。しかし、にせキリストというのは、一見、救い主キリストと似ているわけですが、その内容は全然違うというものです。つまり一応は聖書も使うだろうし、キリスト教という名前も使うかもしれないし、お祈りもすることでしょう。

「にせ」というものは「本物」に似せて作られるものですから、シロウトの目にはドチラが本物かが、そう簡単に区別ができないようになっていくわけです。だからこそ、多くの人々が惑わされるわけです。

話は変わりますが、最近、有名ブランドのにせ物が横行していると新聞にとり上げられています。ペンギンマークのゴルフウ



エア、マンシングのにせ物が、一流デパートで売られていた、というのですから驚きです。一流デパートの係でも見抜けなかったとしたら、シロウトの目には全然わからないでしょう。その他、女性もののバッグ、ランセルやグッチ、デイオールなど、遠くで見たら識別できないものがたくさん出回っている現在です。

ただ一見しては判断できませんが、使ってみると違います。本物のマンシング・ウエアは、何回洗っても着くずれしないのに対して、にせ物は一回洗うとヨレヨレになってしまうそうです。

このように一見では判断できない「にせキリスト教」が「世の終わりの前兆」として出現してくるのです。そして、その内容は全然違うものなのです。

現在、一般に知られている「にせキリスト教」は、次のようなものです。

●ものみの塔（エホバの証人）

一般の教会で使っている聖書は使わないで自分たち独自の「新世界訳」というものを

使っています。一九世紀後半に始まったこの新宗教は、驚くべき勢いで世界に広がっています。特に、婦人たちによる全家庭訪問には熱心です。

●原理福音世界統一基督神靈協会

一般には、原理運動または統一協会と呼ばれています。どれもそうなのですが、多くの人が惑わされる、という預言のとおり、非常にたくさんの人々が集まっているのが現状です。ここでは、聖書も使いますが実は最も基本となるのは、聖書ではなく「原理講論」という本です。文鮮明という韓国出身の指導者の下に、集団結婚するというニュースは新聞や雑誌でよく取り上げられます。

●モルモン教（末日聖徒イエス・キリスト教会）

街角で二人ずれの若い外人をみかけたことがありますか？「英会話を習いませんか」と声をかけてきます。ものみの塔の人も、統一教会の人も、モルモン教の人も、一見すると、みんないい人ばかりです。

モルモン教も、ものみの塔と同じく、一九世紀にアメリカで始まりました。やはり、

聖書よりも、「モルモン経典」の方を重要視します。

まだ他にもありますし、これから新しいにせキリスト教がでてくることになるでしょう。そして、本物のマンシングとにせ物とが一見して区別できないように、多くの人々は、全然区別できないことでしょう。

そして、恐ろしい事実は、これらが全部ここ一〇〇年くらいの最近に出現してきた事実です。どちらが本物か、という議論がなされることがありますが、それは昔からある方、つまり先にあるもの、元祖の方が本物なのです。

②戦争が多発し、民族は民族に、国は国に敵対する。(注10)

第二次世界大戦後、日本と南極以外では、いつでも戦争があるという現状ではないでしょうか。そして、同じ民族が民族に敵対するような現実ができたのも、第二次大戦後ではないでしょうか。

たしかに、アメリカの南北戦争や日本の戦国時代のように内側だけの戦争もありました。けれども元来一つの国だったものが、分かれて戦ったわけではありませんでした。

第二次大戦後のドイツ、朝鮮、ベトナムを考えてみて下さい。一つの国だったものが、ソビエトとアメリカによって二つに分かれてしまいました。親と子が、兄と弟とが、東西あるいは南北に分かれて銃口を向け合うような事実ができたのです。

私が韓国の教会を訪ずれた時、お世話して下さった家の御主人は、御自分の弟が北朝鮮軍兵士として戦っているのを目撃して、情けなく悲しかった、と話して下さいました。

③方々にききんと地震が起こります。(注11)

豊かな日本、スーパーマーケットにいけば外国の製品まで手に入る日本、夜中にお腹がすいてもセブン・イレブンですぐ間に合う日本。こんな毎日を私たちは送っています。けれども、一步東南アジア、特にインドやバングラ・デッシュ、またアフリカに行ってみると、いかに食糧難で苦しんでいるかがわかります。

たったミルク一杯のために行列が続きます。長い間、雨が降らないため、家畜も餓死

していきます。国際赤十字の活躍などは良心的プロデューサーによって、たまにテレビに放映されます。しかし、そのような外国の悲惨な状況より、ゴルフやファッション、芸能ニュースの方が幅をきかせていますので、ほとんどの日本人が、「ききん」なんてことは、全然関係のない話として聞いています。

一方、地震研究所の資料によれば、ここ三〇年の間に、世界的に地震の回数が増加しているとのこと。しかも、それは急激な頻度になりつつある模様で、過去には同じような傾向はなかった、といわれております。地震の多い日本では、今さら、という感じもありますが、これは世界的規模で増加しているのです。

④多くの人たちの愛は冷たくなります。(注12)

なぜ、愛が冷たくなるのかという理由は、不法がはびこるからである、と聖書は語ります。

不法とは、つまり法律や道徳に反することや、そして何よりも聖書の語る正しい人間の姿からズレル、ということなのです。

たとえば、家庭がありながら、他の異性と交際する浮気が不法です。日本では浮気の相手を「愛人」と呼んだりしますが、これは奇妙な表現です。「浮気の相手」の真の幸福を願うなら、(本当の愛はそうなのですが)家庭のある人と交際してはいけない、と注意するはずなのです。ですから、浮気をする人は実は家庭を憎み、浮気の相手を利用している大罪人なのです。

他にも、いろいろな不法がありますが、このような状況で、マトモな愛が育つでしょう。か。愛は育つどころか冷たくなります。

厚生省の「五六年人口動態の概況」によれば、またもや離婚が増加したそうです。五年の離婚件数は、初めて一五万組以上になり、三分二四秒に一組が離婚していることになる発表されてきました。

「終わりの日」が近くなっている現在、聖書の預言のとおり、これからはもつと離婚が増加するでしょう。そして、離婚という法律的手続きをしなくても、実質的に夫婦の心がバラバラで愛の冷たい家庭はアッチコッチにあると推測されます。

今、幸福な家庭をもてるのは、よほど良心のしっかりした人か、あるいは、創造主なる神を恐れて生きる人しかないのではないのでしょうか。

⑤ 御国の福音は全世界に宣べ伝えられます。(注13)

聖書の語る救いが、全人類に宣べ伝えられるのです。現在、聖書の言葉は、一五〇〇以上の言語に翻訳され、ニューギニアやアフリカの奥地まで届こうとしています。ただ読み書きのできない人の多い地域では宣教は大変な仕事です。

しかし、テレビやラジオという方法で、かなり広い範囲にわたって伝えることが可能になりました。

日本でも、まだ教会のない市や町がたくさんあります。聖書の過疎地帯というのが現状でしょう。日本での宣教は急ぐ必要があります。

では、御国の福音とは一体何なのでしょう。どんなことが全世界に宣べ伝えられるのでしょうか。そのことについて次の章で調べてみましょう。

第5章 御国の福音

滅亡からどうしたら救われるか。

ノストラダムスにしろ、ファチマにしろ、要するに「滅亡の日」が来る、というだけにとどまっています。それでは人々はただ不安になります。「どうせ、世が終わってみんな滅亡するなら、したいことをやってしまえ。」というような、メチャクチャな考えになっ
てしまいます。そうなったら、世の終わりが来る前に、世の中は手のつけられない状況になるでしょう。あるいは、三角形の水晶をたくさん集めれば、「終わりの日」の滅亡から助かる、というような迷信もできます。三角形の水晶に助ける力なんかあるわけがないのに、そんなものに頼ろうとします。

しかし、聖書は確かに「終わりの日」が来る、ということとを預言していると同時に、

その「終わりの日」の滅亡から、どうしたら救われるかを教えてくれるのです。

では、どうしたらこの滅亡から救われるのでしょうか。聖書は私たちに二つの道を提
供しています。

へー第一の方法 — 律法を守る —

滅亡。肉体が死ぬだけではなく、創造主の前に永遠の刑罰を受ける。この滅亡から救
われる第一の方法は、「律法を完全を守る。」ことです。

律法というのは、創造主なる神が人間に与えた規則です。

一番大切な律法は次の二つです。(注14)

「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛
せよ」

「自分と同じように、あなたの隣人を愛せよ」

もちろん、律法はこの二つだけではありません。「十戒」という代表的な律法がありま

す。声を出して、一度一から一〇まで読んでみて下さい。(注15)

一、あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。

二、あなたは、自分のために、偶像を造つてはならない。それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。

三、あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。

四、安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。

五、あなたの父と母を敬え。

六、殺してはならない。

七、姦淫してはならない。

八、盗んではならない。

九、あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。

十、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。



このような「十戒」の他にも、細かい律法が山のようにあります。それらすべての律法を一つでも破ると、罪を犯したことになります。そして、滅亡から逃げることはできません。

「十戒」の六と七とをもう少し詳しく調べてみましょう。聖書の「律法を完全を守る」というのは、どのような基準かが、わかってもらえると思います。

六、殺してはならない。

これは、もちろん人を殺してはいけない、ということです。そして、聖書の要求する基準では、実際に人を殺さなくても、次のような場合、人を殺したと同じことになるのです。

- 他の人に向かって「能なし」と言うこと。
- 他の人に向かって「バカ者」と言うこと。
- 他の人をののしったり、憎んだりすること。

右のようなことは、心の中ですでに殺人を犯したことになります。ですから、親や兄弟に向かって「バカヤロウ」と一度でも言えば、あるいは、言わなくても心でそう思え

ば、その人は永遠の刑罰に行くことになるのです。「終わりの日」の滅亡から逃げることは当然できないのです。

もう一つ、七を調べてみましょう。

七、姦淫してはならない。

これは、結婚している相手以外とのセックスを禁じた律法です。

ですから、浮気や売春をすることは、この姦淫の罪となり、やがて滅亡します。また離婚した女性と結婚することも姦淫の罪になります。聖書の基準からすれば、芸能人のほとんどが姦淫の罪を犯していることになりました。

そればかりではありません。聖書の基準は実際にしなくても、心の中の悪い思いも犯罪なのです。イヤラシイ気持ちで女性の体を見ることは、すでに心の中で姦淫の罪を犯したことになるのです。

そんなこと言ったら、男は全員、姦淫の罪を犯したことになるではないですか、とおっしゃりたいでしょう。

全く、その通りなのです。

男性ばかりではありません。女性も、老人も子供も、以上のような基準で「律法を完全にする」ことが滅亡と刑罰から救われる第一の方法なのです。

この全宇宙を創造した神は、完全な方、聖なる方ですので、「まあまあ立派な人」ではダメなのです。

一度でも偶像（石や木で作られた神）を拝んだり、一度でもウソをついたりすれば、その人は罪人として死と刑罰に向かい、「終わりの日」の滅亡から救われることはありません。

それでは誰も救われないのでしょうか。

確かにそうなのです。聖書は第一の方法「律法を完全にする」という方法を用意していますが、この方法で救われる人は、残念ながらいらないのです。

そこで、創造主なる神、すなわち、石や木の神のように耳も聞こえず、話もできない人間を作った神ではなく、人間を創造された神は、第二の救いの方法を用意なさいました。

へ2へ 第二の方法 ―キリストを信じる―

滅亡と刑罰から救い出され、永遠の生命にあずかる第一の方法は、「律法を完全を守る」という行動によるものでした。しかし、聖書の語る基準には、誰一人として到達できないことがわかりました。

そこで、用意された第二の方法は「信じる」という信仰によるものなのです。

創造主なる神は、聖なる方ですので、あなたや私が犯した罪をウヤムヤにはなさいません。律法を犯した者に刑罰を科する方です。あなたや私の人生を全部ご覧になって、どの部分で律法を破ったかを点検されます。

誰も見ていないところで犯した罪。この地上の裁判所の裁かなかった罪。警察も逮捕できなかった完全犯罪や時効の成立した犯罪。その他、すべて律法に反する罪は、創造主なる神が正しい刑罰を必ずなさいます。

しかし、創造主なる神は同時に愛の方です。あなたや私が滅びないで生命を得るよう
に、「終わりの日」の滅亡から救われるようにと切に願っています。

誰も滅亡と刑罰を望んでいません。創造主なる神も望んでいません。しかし、あなたや私がすでにやってしまった律法への罪の処刑は、「まあ、いいじゃないか」というわけにはいかないのです。

あなたや私が滅亡から救われるためには、誰かが身代りとなって、あなたや私の罪のために処刑される必要があります。

聖書は、「血を注ぎだすことがなければ罪の赦しはありません」(注16)と語っています。ですから、誰かが、あなたや私の身代りになって血を注ぎだしてくれる必要があるのです。そうでなければ、あなたや私の罪の赦しはないのです。

でも、誰が好きこのんで、処刑され血を流してくれるものでしょうか？あなたや私が滅亡と刑罰から救われるために、誰が自分から進んで、処刑されてくれるものでしょうか？

しかし、ここに驚くべきニュースがあります。イエス・キリストは、自分から進んで、あなたや私の身代りとなって、苦しい十字架の刑に処せられたのです。

イエス・キリスト御自身は一度も律法を破ることはしなかったのです。けれども、全人類の、過去も現在も未来も、すべての罪を一人で背負ったのです。

そんなこととは知らない人々は、イエス・キリストにつばをかけたり、ののしったり、なぐったりしました。手と足とにクギを打ちつけ、わき腹をやりでさしました。

イエス・キリストの注ぎだした血によって、実は、身代りの死を信じる人々の罪は赦され、「終わりの日」の滅亡から救われるのです。そればかりではありません。信じる人には、幸福な人生を与え、永遠の生命への道を歩むことができるように導いて下さるのです。

今も、この驚くべきニュース「イエス・キリストがあなたの身代りとなって十字架で死んだ」ということを知らない人は、十字架なんて、ロマンチックな女の子の趣味ほどにしか考えていません。しかし、このニュースを信じる人には、十字架こそ、生命への道なのです。

信じていない人にはバカらしいかも知れませんが、信じる人には、神の力であり、イエス

・キリストは、罪を赦すために、身代りに刑罰を受けて下さった救い主なのです。
 このイエス・キリストを信じ、今までの罪、神にそむいた生活を反省し、新しい人生を歩もうとすることが、第二の方法「信仰」なのです。しかし、キリストの救いを、信じない人は、第一の方法「律法を完全を守る」ことしか、「終わりの日」の滅亡から救われる方法がないのです。

聖書の預言が歴史において、確実に実現してきたように、この救いの言葉（御国の福音）も確実に実現していくのです。あなたも、どちらかの方法で、滅亡から救われていただきたいのです。



第6章 「終わりの日について」

〈一〉「終わりの日」の状態

聖書が預言する「終わりの日」は一体、どのような日なのでしょう。どのようなわざわいや呪いが起こるのでしょうか。

ここで、ヨハネの黙示録に預言されている代表的な事柄を、そのシリーズごとに分けて調べてみましょう。

〈1〉馬のわざわいのシリーズ（注17）
戦争が多発して、人々は互いに殺し合うようになります。そして、戦争ばかりしてい

るので畑や田は荒らされ、農産物が育たなくなり、ききんとなっていきます。食糧品は値上りし、食費はウナギ昇りになります。また、死に至る病氣、いろいろな疫病が伝染して、これらの病氣によって死ぬ人がたくさんでるようになります。

(2) ラッパのわざわいのシリーズ (注18)

大きな火事によって、地上の三分の一が焼けくずれてしまいます。また、海の三分の一も汚染され、海の中の生き物の三分の一が死にたえます。船も使いものにならなくなります。川の水も汚染されて、その水のために、多くの人々が死ぬようになります。

また異常な様子が空に広がり、さそりのような恐ろしい毒をもつ、いなごが大量発生して人々に危害を加えるようになります。

おびただしい軍隊の戦いのため、人類の三分の一は殺されます。

これらの災害をのがれて助かった人々は、まだ自分の悪い行ないを反省しようとしません。逆に、金属や石や木で作った偶像を拝みつづけ、魔術や盗みをくり返して罪を重ねていきます。

〈3〉鉢はちのわざわいのシリーズ（注19）

キリストに反対している人々は、ひどい悪性のはれものができます。

海は血のようになり、海の中の生きものはみんな死んでしまいます。また川までも血のようになって飲むことができません。

太陽は激しく燃え、人々を焼いてしまうほど燃えさかるようになります。

こんな災害にあっても、人々は、まだ創造主なる神に対して反抗し、今までの行ないを反省して、キリストの十字架による罪の赦しを求めないのです。

このような恐しい、「終わりの日」がやがてやってくるのです。この滅亡から救われる方法は、イエス・キリストを信じる以外なのです。（注20）

〈二〉「終わりの日」はいつなのか

「終わりの日」は、いつたい、いつ来るのでしょうか。確かに、「終わりの日」の準備が歴史的事実として実現してきたことは、すでに調べました。

では、その日は、何年何月なのでしょう？

たとえば、ノストラダムスは、人類滅亡の日は「一九九九年七月」としています。

ファチマによれば、五月一三日（木曜日）とされています。今年、ローマ法皇がスペインに行ったとき、ある男にナイフでさされそうになりました。その日は、五月一三日（木曜日）だと指摘しています。しかも、それは暗殺未遂におわると預言されていたと伝えられています。次の五月一三日（木曜日）は何年でしよう。

また、ある占い師によれば、一九八四年に東京に大地震が起きて、日本は終わると言っています。

また、ある地震研究家は、過去のデータから、一九八三年九月一五日に大地震が起これるといい、また別の人は、一九八五年までに日本はソビエトとアメリカによって分割されると語っています。

また、軍事顧問の専門的判断によれば、一九八五年に第三次世界大戦が始まるということです。

どれが本当なのでしょう、一体、何を信じたらいいのでしょうか。

ここで、仮に、ノストラダムスのいう「一九九九年七月」というのが本当だとして考えてみましょう。

もし、そうだとしたら、あなたはどうしますか？

「まだ一七年も先のことだから、そのうちに考える」

「今のうちに好きなことをやっておこう」

「お金を全部使ってしまったら」

「好きな洋服をたくさん買って着てみよう」

「勉強しても無駄だから遊んじゃおう」

いずれにしろ、一九九九年七月が近づくにつれて、滅亡を信じる人々は、投げやりな態度になります。殺人事件や強盗事件が発生しても「どうせ、世の終わりだ」というので、警察は犯人をつかまえないでしょう。火事になっても、「どうせ終わりなんだから」ということで消防車も駆けつけないというようなことになるかもしれません。

一九九九年の四月か五月になれば、ノストラダムスを信じる人々は、働くことがバカらしくなって、毎日遊び放題、飲み放題あらゆる娯楽をしようとするでしょう。

殺人や盗み、電車や車の事故がアツコツチで起こっても、ほっばらかしのままになるのではないでしょうか。

こうなると、「終わりの日」が来る前に、実質的な「終わりの日」の状態になってしまいます。

それでは、聖書は「終わりの日」はいつ来ると語っているでしょう。この権威ある書物、その預言がことごとく実現していく聖書は、次のように語っています。

「その日、その時はいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます」(注21)



ここで、子とは、子なる神、救い主イエス・キリストのことです。父とは、創造主なる神のことです。

ということは、全宇宙、そして人間さえも創造された父なる神以外は、その日を知っているわけがないことになります。だれもその日を予言することや、断定することができないわけです。

ですから、その日を予言したり断定したりする人がいるとすれば、創造主なる神の聖なる靈感ではなく、神に敵対する悪魔の悪い霊によってしていることになります。創造主なる神しか知らないことを、どうして予言できるでしょうか。だれであるにせよ、たとえ、聖書の学者でも「何年何月」と預言するのは、聖書から離れた偽りの霊に犯されていると考えて下さい。そういう意味でノストラダムスの予言などは、よく当たるとしても悪魔の霊によって予言しているといえるでしょう。

「何年何月」とはつきり断定した方が、人々にウケルかも知れません。しかし、創造

主なる神以外のものが断定することは、自分を神とすることと同じなのです。

では、私たちは、どのような気持ちでいればよいのでしょうか。

「終わりの日」は、明日かも知れないし、私たちが死んだズーッと後のことかも知れないのです。「終わりの日」が近いからといって、一生けん命に仕事をしなかったり、学校なんか関係ないといって、勉強しなかったり、このような投げやりな気持ちではダメです。

あなたの一生は、平均寿命以上に生きられると考えて、勤勉に学び、また仕事し、貯蓄をし、よい家庭を築いていく必要があります。「**落着いた生活**をすることを志し、**自分の仕事に身を入れ、自分の手で働きなさい**」と聖書は勧めているのです。(注22)

同時に、この地上の生活だけに望みを置かないで、明日「**終わりの日**」の滅亡がやって来ても大丈夫のように、心の備えをしておく必要があります。「**終わりの日**」が来てしまつてからでは、泣いても叫んでも、その時には手遅れなのです。

明日であるにしろ、あなたの一生の後にしろ、いずれにしろ、この地上を去っていかなくてはなりません。残された時間の長さや短かさに、安心したり、不安がったりするのではなく、今日という日のうちに、イエス・キリストの御国の福音を受けいれて、滅亡から救われていただきたいのです。

聖書が、その日その時をはっきり預言していないのは、いつでもその準備をしておく必要があるということなのです。

そして、御国の福音を聞いてイエス・キリストを信じた人は、「終わりの日」が近づいている現在、家族、親族、友人たちに、この御国の福音を伝えていただきたいのです。

第7章 これからどうなっていくのか

今まで調べてきたように、「終わりの日」の前に準備されなければならない条件が、ほぼそろってきました。まだ、実現していないことと言えば、

一つは、イランがソビエト体制の子分になっていないこと。

一つは、エルサレムに神殿が建っていないこと。

もう一つは、全世界に御国の福音がまだ完全には宣べ伝えられていないこと。
以上の三つくらいなものです。

これらの三つも、時間がたてば、やがて実現することは、聖書の他の預言がそうであったように、確実です。



では、これらの条件がそろつたら、どうなるのでしょうか。これから先に起こることについて調べていきましょう。

へー反キリストの登場

第二次世界大戦の前、ドイツからヒトラーが、イタリアからムッソリーニが登場し、世界を戦争にまきこんでいきました。

それと同じように、悪魔の手先である反キリストがやがて登場し、人々を支配します。

ヒトラーが登場した時のことを考えてみましょう。彼はいきなり独裁者になったわけではありません。

若い時にはミュンヘンで暴動をおこしたりして失敗しています。その当時は、彼は社会的に相手にされないような存在でした。

しかし、時代は変化し始めました。一九三〇年代になるとドイツの経済はまるでダメ。会社はドンドンつぶれて何百万人ものが仕事をなくしました。仕事がなければ、生活していきません。このままではどうしようもない、「こんな時、〇〇〇がいてくれたら」

と力強いリーダーの登場が期待されました。このような状況の中で、ヒトラーが暴動の中心者となり、成功していったのです。人々は、ヒトラーの強引ですが、力強い指導力に心をまかせたのでした。

反キリストも、多くの人々が困っている時に、救世主のように現れます。

この人物は、大変有能で力があります。多くの人は、この人物の演説に大きな拍手を送るでしょう。それほど魅力的な人物なのです。

しかも、不思議なことが起こるのです。

この人物は、打ち殺されたと思われる傷を受けます。人々は、死んだと思います。けれども、その致命的な傷がなんと直ってしまうのです。これはショッキングな事件で、テレビのレポーターたちがよるこんで報告するでしょう。テレビでは、ただ「不思議ですね、不思議ですね」というでしょうが、このことも、聖書は預言しているのです。(注23) この事件が起こると、人々は、この人物を神の使いと信じこみ、拝み始めます。

ちよつと考えてみましょう。イスラエルとの平和を実現したサダト・エジプト大統領。

ノーベル平和賞までもらいました。しかし、軍事パレードの最中にエジプト軍兵士に射殺されました。このニユースは、世界中の人々を驚かせました。さて、もしサダト大統領が死んだと思われた後、傷が直って、奇蹟的に元気になったとしたら、エジプト国民を始め多くの人々は彼を神の使いと思うでしょう。

このようなことが、反キリストに起こるのです。

その後、この人物は、公然とキリストに反抗し、自分の像を作り、人々に拝むように強制します。反キリストの像を拝むことを拒否する人々は、この人物の命令で殺されてしまいます。また、コンピュータで、人々を管理し、この人物の像を拝まない人は、物を売ったり買ったりすることができなくなるのです。(注24)

この人物について、聖書はヒントを与えています。それは、その人物の名前をヒブル語で書いてみると、ヒブル語のアルファベットの合計が、六六六になるはずです。

例をあげてみましょう。一世紀にクリスチャンを大迫害した「ネロ皇帝」をヒブル語で書いてみると次のようになります。

ヒブル語のアルファベットは数字にもなっています。下の言葉の数字を加えてみてください。合計が六六六になりますね。彼は、ローマ帝国のトップに立った人物ですが、彼と同じように、名前の合計が、六六六の反キリストが、やがて登場するのです。

また、この人物は、中東に平和をもたらします。

しかし、この中東の平和も一時的で、三年ほどしか続きません。およそ三年が過ぎると、世界最終戦争が始まります。

ル	サ	カ	ン	ロ	ネ	
700	60	100	50	6	200	50

右から左へ読む

へ二〇 世界最終戦争

ソビエトが、いよいよイスラエルに攻めこんで来ます。東ヨーロッパ軍、エチオピア軍、リビア軍、イラン軍と一緒にやってくるのです。

イスラエルの人々が安心して住んでいるとき、あらしのように攻めこんでくるのです。

(注25)

さて、ソビエトが攻めこんで来るには、それなりの理由や、目的がきつとあるでしょう。「ヒマだから」とか、「フリーリングで」戦争することはまずありません。

では、一体何が原因になるのでしょうか。多分、経済計画がダメになり、石油もなくなり、食糧も底をつくからだと思います。

アメリカ中央情報局(CIA)の昨年までの発表によれば、ソビエトの石油は、一九八五年までしかもたない、といっていました。それが最近になって、CIAは、ソビエトの石油は、一九八五年ではなく、一九九〇年まではもつと訂正しています。しかし、いずれにしろ、やがては、石油がなくなるわけです。

また、NHKの報道特集によれば、ソビエトの穀物は三年続いて不作なので、アメリカから穀物を輸入しなければならぬ現状です。一生けん命に品種改良をして穀物増産しようとしています。が、あまりパツとしません。

石油がなくなり、食糧も底をつく。経済もダメとなれば、軍事行動に出る可能性が大きくなります。

こうして、ソビエトは国の危機を乗りこえるために、また、イスラエルの死海に多量に埋蔵されている鉱物資源を求めて、攻めこんでくるとは思われます。

攻めこんでくる理由は何であれ、こうして世界最終戦争が始まるわけです。

ソビエト軍は、超近代兵器も使いますが、陸上の機動部隊がやはり中心となります。不思議なことに、武装した馬と騎兵の大集団が攻めこみます。(注26) もちろん戦車やヘリコプターも使われるでしょうが、馬が使われるというのは、時代遅れの感じがしますね。しかし、ソビエトがアフガニスタンに攻めこんだ時、山岳地帯では武装した馬が戦力の中心であったことを思い出すと、また馬が使われるのは、当然のことです。現在、

ソビエト軍がアフガニスタンに攻めこんでいるのは、実は、この日のための準備なのかも知れないのです。

ソビエト軍が動き始めると、反キリストも自分の軍隊を出動させます。こうして、中東での戦争は本格的になっていきます。

ソビエト軍は、初めイスラエルに攻め入り、エジプトにまで軍隊が入って行きます。そして、最も激しい戦いは、イスラエルの北部にあるメギドの平野で行なわれるのです。

メギドの平野は、別名ハルマゲドンと呼ばれ、見晴らしの大変よいタダッピロイ広野です。私が、このメギドの平野に旅行したとき、次のような看板が立っているのにはびっくりしました。

「この平野で世界最終戦争が行なわれる」

さて、このハルマゲドンの戦いでは、核弾頭をつけた爆弾が使われます。聖書の表現

では、「兵士たちは立ったまま、その肉が腐る」(注27) となっていますから、中性子爆弾も使われるでしょう。この爆弾により、ソビエト軍は、大きなダメージを受けます。残った兵士たちは、同士打ちを始めてしまうような悲惨な戦いです。

このような最悪、最大の戦いの最中に、イエス・キリストが地上に帰ってきます。

〈三〉イエス・キリストの再臨

(イエス・キリストがもう一度地上に帰ってくること)

「ノストラダムスの大予言」の著者、五島さんは、「恐怖の大王」は、ICBM(大陸間弾道弾)か、彗星か、あるいは、宇宙人襲来か?といろいろな説をあげていますが、ノストラダムスがいう「恐怖の大王が帰ってくる」とは、まさに、再び地上に帰ってこられるイエス・キリスト、救い主のことなのです。まさに、悪の霊によって予言したノストラダムスにとっては、イエス・キリストは恐怖なのです。なぜなら、イエス・キリストが地上に帰ってくる時こそ、悪魔の活動が終わるときだからです。

イエス・キリストは輝く栄光とともに、天の雲に乗って地上に帰ってきます。

それは、雷が一瞬のうちに、ピカノと光ってみんなにわかるように、一瞬のうちにすべての人にわかります。すると、イエス・キリストを十字架につけて殺したユダヤ人たちが悔いて、イエス・キリストを信じるようになります。(注28)

それは、それは、スバラシイ日なのです。輝かしい日なのです。

神が用意された第二の救いの方法。

イエス・キリストを信じて、十字架の上で流された血によって、その罪を赦していただいたクリスチャンにとっては、最高の喜びの日なのです。

今までは、地上の教会で、日曜日ごとに礼拝をしていました。しかし、その日には、顔と顔を見合せて、イエス・キリストと対面するのです。

長い間、教会の歴史が始まってから待ち続けた喜びの日なのです。

イエス・キリストを信じて、すでに死んでしまったクリスチャンは、その日には、墓から復活し、もう二度と死ぬことのない栄光の体をいただくのです。そして、その日、生

きているクリスチャンも、栄光の体に変化させられて、天において、イエス・キリストを高らかに賛美するのです。(注29)

再臨のイエス・キリストは、

信じない人には、恐怖の大王、

信じる人には、待ちこがれていた花むこ、

「終わりの日」は、

信じない人には、最悪の日、苦痛の日

信じる人には、最良の日、喜びの日

全時代の、全世界のクリスチャンが待っていた晴れやか日なのです。

イエス・キリストは大きな権能と力により、悪魔が活動できないように、底なき穴に封じこめてしまいます。(注30)

悪魔は、この日を一番恐れています。だから、一人でも多く仲間をふやし、悪魔と同じ結末に、ひきずりこもうとしているのです。

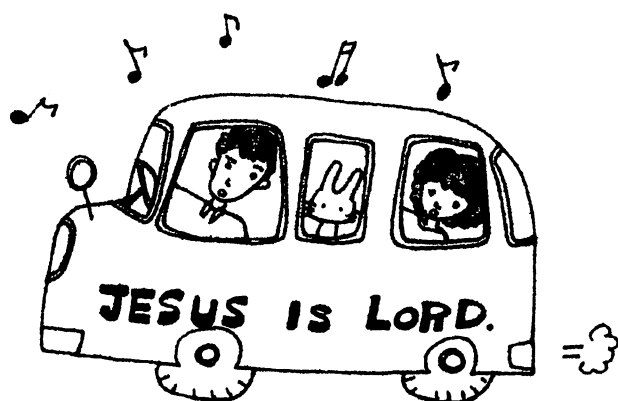
悪魔はいつも共犯者を呼びます。自分がやると、「お前もやれよ」という具合いです。たとえば、万引きする人は、自分がすると友だちにも、するようにいいます。共犯者、共に罰を受ける人が、ほしいのです。こんな人と友だちになつては、あなたが滅びます。こういう人は、本当の友だちではありません。

イエス・キリストの友だちになつて下さい。神を愛し、自分を愛し、人を愛するスバラシイ人生を歩んで下さい。

この「終わりの日」を恐怖の日として迎えるか、最高の喜びの日として迎えるかは、今のあなたにかかっています。

イエス・キリストに背を向けて、恐怖の日を迎えますか。それとも、イエス・キリストと共に歩み、最高の喜びの日を迎えますか。

最高の喜びの日として迎えるためにも、御国の福音、第二の敗いの方法、十字架のこ
とばを受けいれていきましょう。



注

- 注1 マタイの福音書24章2節
 マルコの福音書13章2節
 ルカの福音書21章6節
 注2 エゼキエル書37章21節～
 注3 申命記28章64節～
 注4 エゼキエル書37章
 注5 エゼキエル書38章12節
 注6 エゼキエル書38章5節
 注7 ダニエル書2章
 注8 ダニエル書9章27節
 ダニエル書11章31節
 ダニエル書12章11節
 注9 マタイの福音書24章5節
 注10 マタイの福音書24章6、7節
 注11 マタイの福音書24章7節
 注12 マタイの福音書24章12節
 注13 マタイの福音書24章14節
 注14 マタイの福音書22章37節～
 注15 出エジプト記20章
 注16 ヘブル人への手紙 9章22節
 注17 ヨハネの黙示録6章～
 注18 ヨハネの黙示録8章～
 注19 ヨハネの黙示録16章～
 注20 使徒の働き4章12節
 注21 マタイの福音書24章36節
 注22 テサロニケ人への手紙 第1、4章11節
 注23 ヨハネの黙示録13章3節

- 注24 ヨハネの黙示録13章15節～
 注25 エゼキエル書38章8節
 注26 エゼキエル書38章4節
 注27 ゼカリヤ書14章12節
 注28 ゼカリヤ書12章10節
 注29 テサロニケ人への手紙 第1、4章16～17節
 注30 ヨハネの黙示録20章2、3節

< 参考文献 >

世界年鑑'82 (共同通信社)
 イスラエルという国 (イスラエル大使館)
 世界史地図 (山川出版社)
 地球最後の日 (ハル・リンゼイ)
 近づいている人類の破局 (高木慶太)

感 謝

この本を出版するにあたり、ミッション2001の
 岸 義紘先生と、ペーテルフォト印刷株式会社の方々、
 そして、本を書くように応援してくれた中学生た
 ちに、感謝の意を表します。

横山英実のよこがお

- 東京の下町で生まれ育ち、ワンパク少年として少年期を過ごす。
- 中学時代は評議会議長、青山学院高等部時代は文化祭実行委員長などハリキッていたが、生きていくことに悩むようになり、大学時代は無気力な青春を過ごす。
- 青山学院大学卒業後、サラリーマンとなるが、人生の満足を見い出せず退職、イエス・キリストにある人生こそ、最高の喜びと知る。
- アッセンブリー教団、小岩教会、吉山宏先生より水のバプテスマを受ける。
- 主の導きにより東京神学大学・大学院で学ぶ。
- キリスト聖協団、元主管者、谷中広美先生より牧師として任命を受ける。
- 日本で唯一の家庭伝道月刊紙「ぼぼ」(ミッション2001発行)の編集長。
- 単立イエス・キリスト教会の牧師
- キリストにある者が、「肯定的に力強く、生き生きと生きる」ことを願いつつ礼拝を守る。
- 好きなもの……スポーツ、旅行、きれいな海、車、牛肉。
- 苦手なもの……ナガイ話、正座、根気よく続けること、イカ、タコ、豚肉。
- 良き妻、かわいい娘、立派な親族、スバラシイ教会員に恵まれ、幸せな日々を送る。

「終わりの日」の警告

定価 400円

1982年10月1日 初版第1刷発行

著者 横山英実 ©1982

〒285 千葉県佐倉市上志津1076

発行 にひきのさかな社

印刷所 ベーテルフォト印刷株式会社

*落丁・乱丁本はお取り替えます。

